

素顔のご入居者 第五十回

ふたりで歩く今が幸せ

本多 鐘馗様(82) 千加枝様(78)



本多様ご夫妻は、苦楽を共にしお互いを思いあい連れ添ってきたおしどり夫婦です。お二人の足跡とこれからのことを語っていただきます。

この人で良かった

鐘馗様「私達は一緒になって50余年、思えば長い時間を共に過ごしてきました。私は無遅刻無欠勤のサラリーマン。37年間ひとつ

処に勤め無事定年を迎えました。趣味はゴルフ。休みはほとんどゴルフ場で過ごしたものです。家内は家事をこなし合間に時間とお財布をやりくりして外食や買い物、文化芸術スポーツ観戦など楽しんでやうです。

私から家内に『よくやった!』と褒めてやりたいことがあります。それは家内一人の決断で土地と家を購入した事。私が知らされたのは事が済んだ後で、ある日『お

父さん、家を買ったよ。』って言うから仰天です。えっ、そんな大金我が家には無いはず。家内は広告をみた瞬間ピンときて借金しても買おうと思った、と言うからその度胸に脱帽です。この家に高い値が付いたおかげでその後何度か家を買ひ替える事が出来、私達は常に棲家に恵まれました。」

人生で一番辛い出来事

鐘馗様「私達が選んだ終の棲家は緑に囲まれた浜松(へうゆう)の里」。家内の姉が私達より少し先に入居していましたので、これから3人のんびり暮らそうと楽しみに思っていた矢先の事です。私に大病が発覚。手術と強い薬により退院後は厳しい闘病生活が待っていました。言いようのない辛さをじつと部屋でこらえる日々でした。そんな時まさかの事態、義姉も病に倒れたのです。

家内は重病人をふたりも抱えて心労がたたり、家内までも眩暈で苦しむ事になりました。私にとつて支えは家内でした。その家内が無理を重ね頑張る姿を見ていられず心配でたまりませんでした。」

千加枝様「あの時が人生で一番辛い時期でした。真夏の暑いさなか、部屋で苦しむ主人をひとり残し、日に2度、ホスピスまでの坂道を上り姉に会いに通いました。『あなたが生きている人、姉さんは見送る人。今は姉さんを優先させてください、ちよつとの間我慢してください。』そう言つて。主人にというより自分に言いかけせるようにして家を出たものです。そんな時、ここの職員さんが『僕たちは奥さんの体が心配です。何かお手伝いできることはありませんか?』と気遣つてくれて本当に有り難かったです。病院まで何度も送つて頂きました。」

入居前より近づいて

鐘馗様「その後義姉は静かに旅立ちました。私の病も落ち着き以前の生活が戻りつつあります。

歩く時は私が転ばないように夫婦で手をつなぎます。知り合いに仲が良いね、とかからかわれると家内は笑つて『私は杖代わりなのよ。』と答えています。その通り、私の心の杖かもしれません。もう少し歩けるようになったら、またふたりで旅行したいですね。」

千加枝様「私達は毎朝少し丁寧に淹れたお茶とほんのひと口のお茶菓子を食べ、1日が始まります。私は趣味の絵手紙を描き、主人は読書などをして、ゆっくり暮らしています。今は横を見れば必ず主人がいます。お互い何をしているのか、何を考えているのか、手に取るようにわかります。些細な冗談で笑つたり時には喧嘩をしたり、夫婦揃つてそんな何でもない日常を送られる事こそが本当の幸せだと実感しています。」



「散歩中、みかんを買いましたよ。」